

ロバート・ブラウニングの悲劇「紋地の汚れ」

三 谷 正

- (一) 序
- (二) 劇の荒筋
- (三) メルトーンとミルドレッドⅡ抒情性
 - (1) メルトーンの慕情とミルドレッドの清潔
 - (2) メルトーンの情熱的愛の告白
- (四) ソロルドとグエンドーレンⅡ謎の解明
 - (1) ミルドレッドの告白とソロルドの激怒
 - (2) グエンドーレンの慧眼
- (五) メルトーンの死
 - (1) メルトーンの真情吐露
 - (2) メルトーンの臨終の際の悲痛な叫び
- (六) ミルドレッドとソロルドの死
 - (1) ソロルドの悲傷の詫
 - (2) 妹の寛恕と兄の罪の重荷
- (七) 結 び

ロバート・ブラウニングの悲劇「紋地の汚れ」

一 序

十九世紀の英国劇壇は名優が輩出し、その絶大な勢力は劇作家を遙かに上廻っていた。そのため劇作家が、いかに勝れた作品を書いても、名優の認めない限り、その作品は上演されなかった。そこで当時の詩人達は詩劇を諦め、劇詩を書き、レーゼドラマ（*lese-drama*）若しくは詩的演劇（*poetic drama*）で満足し、劇場にそっぽを向け、書齋に立て籠もるのであった。それでも時折は劇場へ流し目を送り、あわよくば十九世紀のシエクスピア（*William Shakespeare*）たらんとして、溢れる詩情を劇に盛るのであった。サウズイ（*Robert Southey*）ワズワース（*William Wordsworth*）ロルリッチ（*S. T. Coleridge*）ラム（*Charles Lamb*）モロニヤ（*Walter Scott*）シユリー（*P. B. Shelley*）キーン（*John Keats*）バイロン（*Lord Byron*）皆然りであった。ブラウニング（*Robert Browning*）もその例に洩れなかった。かれは夙に劇壇から瞩目され、劇場と浅からぬ関係^①にあったにかかわらず、かれの天才を以ってしても尚、劇壇をしてかれを認めさせることができなかった。かれの作「ストラフォード」^②（*Stratford*）は名優マクリーディ（*W. C. Macready*）の請いに応じて書かれたものであったが、上演の結果は成功せず、マクリーディに満足を与えなかった。「ピポは過ぎ行く」（*Pippa Passes*）は文学的価値高く、劇としても均整のとれた作であるにかかわらず、単に劇の素材にすぎないと片付けられた。「ヴィクター王とチャールズ王」（*King Victor and King Charles*）及び「ドルーズ人の帰国」（*The Return of the Druses*）の二作もマクリーディによって不合格の印を押された。「ロンボの誕生日」（*Colombe's Birthday*）は名優キーン（*Charles Kean*）との間に不和を生じ上演が十年遅れ「靈魂の悲劇」（*A Soul's Tragedy*）及び「ルリア」（*Luria*）はブラウニングの自信の作であったが、難解な言葉を用いた高等なお喋りが劇の流れを堰きとめると非難された。このようにブラウニングの劇は全体としては評判はよくなかった。しかしここに取上げる「紋地の汚れ」（*A Blot in the Scutcheon*）は比較的無難な作であった。それでもこの作はごたごたとした経緯^③の後に、やっと上演されたものである。この劇は名門の貴族が家名を重んずるあまりに妹と若い貴族との純真な恋を紋地の汚れと誤解し、その誤解は結局解消するものの、遅きに過ぎ、兄妹及び若い貴族の三人が死んで行くという悲劇である。詩劇としてブラウニングの劇作家的技術及び演劇的把握力、劇の流れの活澁であることなど見るべきものがある。しかしわたくしがこの劇に於いて心打たれるのは、この劇の現実的抒情性と、三人の登場人物のいづれもが運命に操られ、悲運に導かれ行くこの劇全体に漲り、劇の終りに近づき最高潮に達する悲痛な哀調である。ここにわ

たくしは登場人物それぞれの台詞を味読することによってこの劇を鑑賞してみたいのである。

(二) 劇の荒筋

ソロルド・トレッシャム〈Thorold Tresham〉という名門の貴族とその妹ミルドレッド・トレッシャム〈Mildred Tresham〉の二人がいた。妹は幼くして母を失い、淋しい生活をしていたので、兄は妹を可哀相に思い、大いに愛していた。妹も亦、母に代り色々世話をしてくれる兄を敬愛していた。トレッシャム家の近くにヘンリー・メルトーン〈Henry Marton〉という若い貴族がいた。妹は淋しさのあまり、この若い貴族と交際するうちに、いつしかこの青年に密かに身を任せるのであった。メルトーン家も名門であった。かれが密かにミルドレッドと情を交えることなく、正式に求婚すれば目出度く挙式の運びに到るはずであった。然るにかれはミルドレッドの兄が学問があり、トレッシャム卿として紳士の誇れ高かったため、卿に対し畏怖の念があり、近づきかね、且つは若さの不注意もあって、密にかの女と情を交えることとなったのである。しかしやがてかれは自らの行為の非を覚り、これを償う意味で、ミルドレッドに相談せず、またかの女との情事を隠したまま、ソロルドにかの女への求婚をするのであった。ソロルドは妹及び従妹グエンドーレン・トレッシャム〈Gwendolen Tresham〉とメルトーンに会う。メルトーン家も名門であり、メルトーンの人物も立派であったので、ソロルドはかれに好感を抱くのであった。ミルドレッドは求婚者が自らの恋人であることを知るが、その場では、それに就いては一言も触れなかった。その後、兄は召使のジェラード〈Gerard〉の密告によって妹に恋人のあることを知る。勿論兄はそれが求婚者であることを知る由もないので、妹に事の真偽を正すのであった。無心の乙女の不注意からではあったが、名門の淑女として紋地の汚れの罪を犯し、兄に迷惑をかけたことにかの女は既に自責の念を持っていた。そのため召使の言葉の真であることを認めるのであった。しかし恋人の名を決して言わぬのである。かくして兄が、求婚者と恋人が同一人であることを知らぬままに事件が進展する。兄は妹とその恋人との情事を、ただ一途に家門の汚れと思ひ込む。やがてその夜、妹の部屋の窓下から一人の男が妹の部屋に入ろうとするのを見、すっかり妹の情夫と思ひ込む。そしてその男を捕えてみると、それが求婚者メルトーンであることを知る。かれは騙されたと思い、自らの気性の激しさから致命的な一撃を加える。しかし男が臨終の際に真情を吐露するに及んで深く後悔し、次いで妹をも死に到らしめ、自らも毒を仰ぎ死ぬのであった。

ロバート・ブラウニングの悲劇「紋地の汚れ」

③ メルトーンとミルドレッドの抒情性

(1) メルトーンの慕情とミルドレッドの清潔

メルトーンはミルドレッドとの情事の罪を償うことを希い勇気を揮ってソロルドの館を訪れる。メルトーンの頼もしい淡白な話振りはソロルド及び従妹グエンドーレンの気に入り二人は満足の態度を示す。メルトーンも大いに喜ぶ。その日の夕、グエンドーレンはミルドレッドの部屋を訪ね、朝、かの女がソロルド及びミルドレッドと共に面会した求婚者の良さに就いてミルドレッドに喜びの言葉を述べる。ミルドレッドは自ら進んで何も言わず、疲労を口実に独りになりたいと言う。グエンドーレンは部屋を出る。ミルドレッドはほっとした表情をし、窓辺の灯の光が色ガラスを通して外によく照り輝く処に置く。やがて窓が開き低い声で、

「純潔一際勝る乙女あり。」

その乙女零れ落ちる露の白玉。

その心、いと高く、その信仰、いと篤し。

眼は黒く潤み、濃き鈴蘭の光あり。

金色の髪、野の葡萄より晴れやかに項に流れ、その項薔薇凌ぐ大理石に勝りて白し。

声には泉の泡立つ囁きと鳥の囀る音楽の響きあり」

と若者が口吟むのが聞えて来る。若者は部屋に入るヤソフト帽と長いマントを投げ更に、

「この乙女言いは『わたしの屋に太陽はなく、わたしの夜に月はなし。恋しきあなたおわさずば、楽しき四月も草溜らびて、雲雀の心

臓破裂し、鼓動止らん」と。

ああ、われ、かの女崇めて、心切なし、この想い、いかに表せん。ああ、伏してかの女の胸に触れたく、気も狂う」

と唄に事寄せてミルドレッドへの熱い慕情を打ち明ける。然るに今宵、ミルドレッドはかれの慕情を素直に受けず、握手も与えなかった。これはメルトーンがかの女に相談せず、独断でその日の朝、兄に面会し、かの女への求婚をしたことを深く訝るからであった。しかしメルトーンは

情を籠て言う。

「若い日の出のように新しい生活^⑩が雨と嵐の傷跡^⑪を伴いながらも、われわれの夜の不思議な不安^⑫の上に現われている。生き生きとした木の枝に、ぼたぼた落ちる花、火のように耀く霞^⑬が見える。東方に立ち上る水蒸気、何とも言えぬ栄光が見える。このたびの早急な求婚は永遠にあなたの傍にいたためだった。こうして傍にいるとき、僕はあなたをわがものとし、あなたを崇めることができる。それなのに、ああ、ミルドレッド、それでもあなたは『これからはそのように参りません』^⑭ということができませんか」

と。これに対しミルドレッドは「罪がわたくし共を驚かしたのです」と巍然として言う。これに対しメルトーンはかれだけが罪を犯したと弁解するが、かの女にはメルトーンとの情事による家門の汚れの罪の意識は計り知れないほど深いものがあつた。そしてその日の朝、兄及び皆の前でのメルトーンとの面会の遣り切れなかつた心情を次のように述べる。

「わたくしは一門の皆の前で、罪深き恋愛の相手を迎えました。わたくしは既に処女ならぬ身なるに、処女の純潔を装う顔付をするのでした。また既にあなたと接吻を交わしたわたくしなるに、相手の言葉に答えるとき、見知らぬ人の唇にこれほど近づいたことがないように唇を震わせるのでした。更には頬も亦処女の頬を装うのでした。ああ、あなたの才能でこの慎重に計画された悪事^⑮を、その始めに何とか止めて下さればと切に望みます。一点でも激しい癪性の吹き出ものは欺瞞の顔を目茶苦茶にするものです。わたくしは無理に暗記させられた偽りの言葉はすらすらとは言えません。却って気が狂い、わたくし共のすべての痛ましい話、恋、恥辱、絶望を口にしたい気持です」

と。ミルドレッドは肉体的には処女を失つてはいたが、精神的には清潔そのものであつた。

(2) メルトーンの情熱的愛の告白

メルトーンがミルドレッドとの情事を隠して兄に求婚の申し入れをしたことをかの女はかれの慎重に計画した悪事であり、かの女に対する侮辱と考えるのであつた。かの女は既に罪に対する天罰を受ける決心をし、かの女から去つた恵み、一度去つた恵み、否、永久に去つた恵みを何とも思っていないことをかれに告げる。これに対しメルトーンはかれの名誉はかの女の名誉であり、不名誉も同様であることを告げ、今朝のソールドへの申込みは取消してよいと明言する。しかしかの女は、明日一門の皆の前でかれに会うことの決定済みなるを告げる。かれは延期を主張する。そこでかの女は更に言う。

ロバート・ブラウニングの悲劇「紋地の汚れ」

「いつだってわたくしは、言葉も、顔付も、身振りも、そんなに容易く用意はできません。どうしてあなたはわたくしを軽蔑せねばならないのですか」^⑩

と。メルトーンは意外の思いのうちに、かれらの最初の出合いに愛が芽生え、それ以後互の愛を高めた心に軽蔑の念などあり得ないと主張し、最初の出合いからの心情を述べる。

「僕はほんの子供でした。今でもそれ以上の何ものでもありません。あなたも最初会ったとき、幼児でした。そうです。あなたの髪は顔の両側に無造作に垂れていました。また僕の愚かな頬は今でも子供のように真赤になります。多くの夢の幻の中で、あなたの兄上と会ったときの僕の頬がいかに真赤に燃えたかを思い出します。あなたも承知のことと思いますが、異性に目覚めた少年は、夢みる乙女の魅力には惜みない賞賛を与えるものです。僕は一人の乙女のことを耳にしました。そしてその乙女を夢にみました。僕はかの女に近付きました。それはかの女と話がしたかったからでした。かの女と共に生き、かの女と共に死にたかったからでした。あなた以外の誰が僕のこの心を知るのですか」^⑪

と、かれの初恋の対象がミルドレッドであったことを述べ、それ以来かの女の凝視のすべて、言葉のすべてを誇りとし、大事な宝と思ひ、最初にして最後の恋をかの女に覚えたことを告白する。そしてかの女の罪の意識はかの女の清潔の心からではあるが、それはまたかの女の幼い無知から生れたものであり、決して恥辱などと考えるべきものでなく、寧ろ新奇な、貴重な、不思議なものに対する少女の剥き出しの喜びと考えるべきであると言ひ張る。またかれは、計画のために気が狂い、部屋の中でただかの女の姿を眺め、その消え行くに任せるものでなく、寧ろかれはかの女に対する慕情の激しさのために正式の結婚をなし、かの女の傍に座り、その呼吸を聞き、睨及びその下の眼を見守りたい切なる希望をもっていること、また、かの女の切角与えた贈物なるかれへの深い愛を心底からはぐくみ、すべてを悲しみと罪とにして光明を盲目とするようなことのないようにしたいことなどを切々と訴えるのであった。そしてこれこそかれの真実であり、決して虚偽でなく、ましてや軽蔑では更々ないと言うのであった。ここに於いてかの女はメルトーンの真意を覺り、

「信じて下さい。ヘンリー、わたくしはおなたを悪く言うつもりはありません。わたくしは過去を悲しみません。わたくし達は愛しつづけましょう。あなたはわたくしを矢張り愛して下さいませうね」^⑫

と言う。これに対しメルトーンも亦、

「ああ、人は自らが傷つけた人を愛しなくなることなんかあったたまるものですか。その翼を軽率にもわたくしが傷つけたわが鳩なる可愛い人よ、わが胸に抱き緊めたいミルドレッドよ、わたくしの胸の暖かさはあなたを大切に抱き強くさせないでおくものですか。自らが採みくちやにした花なるあなたを大切にしないことなんかあるものですか。わたくしの人生戦闘の兜の上の花、戦闘の目標、戦略の核心のあなたを大切にしないでおくものですか。ミルドレッド、わたくしはあなたを愛しています。あなたはわたくしを愛しています」

と優しく言うのであった。愛する男の真情を知り、かの女は心のうちに思うのであった。

「わたくしはいと若くしてかれを愛した。わたくしは母なきが故に、また神もわたくしを忘れし故にかれと恋に陥った。しかしそれはもう許るされてよいと思う。これには何の疑の余地もない。死ぬほどの苦惱ももう過ぎた」

と。このミルドレッドの言葉の何と強くわれわれの心を打つことか。かくして母なき乙女ミルドレッドはメルトーンの愛の深さを覚り、かれの正式の求婚を偽瞞的態度とした疑惑も解け、メルトーンが二人の将来の幸福のためにした計画と考え直し、互の最後の密会を翌日の夜と決め別れる。

(四) ソロルドとグエンダーレンⅡ謎の解明

(1) ミルドレッドの告白とソロルドの激怒

ソロルドは興奮してジェラードを書斎に連れ込む。ここでソロルドはジェラードがさきに知らせた事実、即ち妹の部屋に深夜男の侵入する様子②の詳細の説明を命じる。ジェラードは、明るい月光下に男がいちいの木から下に降り、かの女の部屋を去って行くのを目撃したこと、また男がいつも部屋に入る前に色ガラスの窓に置かれた灯の合図を待つことなどを話す。ところがジェラードは姫ミルドレッドの将来の幸福とトレッシャム家の名誉を思つて密告したものの、かれ及びかれの先祖が仕えたトレッシャム家の当主ソロルドへの忠誠と若い姫への献身的愛情との板挟みとなり、ソロルドの疑い深い、ぶっさら棒な質問に困難な立場に置かれる。しかし一度事実を口にした以上、その詳細を答えざるを得ず不承不承に答える。ジェラードが去り、独り部屋に残ったソロルドはただ驚くばかりである。けれどもジェラードの密告は妄想であり、虚偽であると考へたくなって来る。しかも亦、事実に相違ないとも思われて来、甚だしい疑心の状態に陥る。かくして真偽いづれとも決めかねる疑心の

ロバート・ブラウニングの悲劇「紋地の汚れ」

中にありながらも、ソロルドの心の衝撃は覆うべくもなく、やがて茫然自失し、身を動かすこともできなくなる。そこへゲエンドーレンが入って来る。かの女は優美な物腰ながらも洞察力と機智に富む女性である。今、読書に夢中の風を装うソロルドの惨めな心を見抜くのであった。即ちかの女の鋭い目はソロルドの直面している困難の核心を洞察するのであった。しかしそれを素振りにも見せず、ソロルドの命令通りミルドレッドを部屋に訪い、かの女を説得し、かの女が兄の希望通りに求婚者との二度目の面会日の取極めをしたことを告げる。ソロルドはそれに耳を傾けず口実を設けて妹の部屋に飛び込み、妹をかれの部屋に連れ来る。そして毎夜かの女の部屋に色男が出入すると聞くが、それは真実か。真実とすればその男の名を言えと迫る。妹は

「お兄さま、適当な方法があればわたくしの罪の贖いを工夫して下さい。わたくしはいつまでも罪を隠し、お兄さまの思い遣りに感謝する言葉など申されません。わたくしの心は激しい更新の火によって、その汚れを清めることを憧れています。でもわたくしを他の罪に陥れないようにして下さい。わたくしには、その人の名は決して言えません。ここ、この部屋でその刀でわたくしの殺されることはわたくしに相応しい刑罰に思えます」

と妹は兄の言葉に対し、自己弁護をせず、ただどんな罰にも堪える覚悟であり、死を切望していると言い、恋人の名は口にしない。妹の罪の告白を聞きソロルドは悲痛の思いに沈むが、また妹思いの気持を取り直す。そして妹に、今後は逢い引きを中止し、昨夜の求婚者との面会日についての手紙の取り消しを命じる。妹は逢い引き中止も、手紙の取消しも口にせず、求婚者に会うことだけを口にす。ここで兄は激怒し、大声でゲエンドーレンとオーステンに

「彼処に女がいる。曾てのミルドレッドでない女がいる。かの女の父の家人のすべてに眠りが祝福を与える頃、夜な夜な男を迎える女がいる。紋地の汚れの罪の共犯者を連れ込む艶やかな狡猾な浮気女がいる。お前達二人及びトレッシュャム家のすべての者を容れるこの屋根の下にその女がいる。もう元のミルドレッドでは決していない女がいる」と激怒し、また、

「かの女は色男との情交を更に確実に隠すための手段として、求婚者と婚約し、色男を断念するかの体裁を装い、澄し顔で立っている。こんな女である故に、皆の前で罵るのだ。恥辱がかの女を地上から追い払わんことを」

と叫び、かれは部屋から飛び出して行く。

(2) ゲンドーレンの慧眼

兄の激しい罵声が終った途端、妹は気絶し倒れる。やがて正気に帰るや、かの女は、母なく、頼るべきは兄のみなるに、あまりの兄の罵言に気絶したのであるとかの女の衝撃の心情を可憐な言葉でゲンドーレンとオースチンに話す。そして更に、かの女の行為は事実で弁解することなど夢想だにしていな。故にこれ以上尋ねないで、兄の宣言通り罰して欲しいと言う。しかしゲンドーレンとオースチンはミルドレッドを宥め賺す。ミルドレッドはゲンドーレンの親切な言葉に感謝する。そこでゲンドーレンはミルドレッドのために取り計りたい、それには若者の名を知る必要がある。だからその名を言うようにと説得する。しかしミルドレッドが決してその名を言おうとしないのを見て、叔母は「少くともその方はあなたの恋人でしょう。あなたはその方を愛しているでしょう」と問う。するとミルドレッドは「ああ、そんなことをお尋ねになりますの、でもわたくしの気分がひどく悪くなりました」と逃げの言葉を発する。叔母は「では矢張りあなたはその方を愛していませんね」と追求する。ミルドレッドは答える。

「それはわたくしをだめにした罪の支えなんです。わたしは眠る前に毎夜申します。『わたくしはとても幼なかつたのです。お母さまもなかつたのです。それであなたの方がとても好きになつたのです』と。すると神さまが寛大に思えて来るのです。そして心を神さまにお預けして眠りにつくのです」

と。ゲンドーレンは尋ねる。「では求婚者に就いてお話してよろしいか」と。ミルドレッドは答える。「わたくしの周りには雲があります」と。ゲンドーレンは「でもあなたは、あの方の求婚を受け容れると言いましたね」と問う。ミルドレッドは「雲があると云っているでしょう」と答える。ゲンドーレンは「わたくしには雲など見えません。求婚者と恋人は同じ方でしょう」とずばり言つてのける。ミルドレッドは図星をさされ、「何という気紛れをおっしゃいますこと」と明答を避ける。ゲンドーレンは「心配なさるな。真相を知っても、ちゃんと胸に秘めておきますよ」と言つてやる。ミルドレッドは「あなたの愛のすべてにかけてわたくしは我慢します。叔母さま、わたくしは叔母さまを信頼しています」と安心する。そこで叔母はオースチンを呼び、部屋を飛び出したソロルドを探しに出発させ、洞察力の鋭いかの女は、万一の恐るべき災に備え、その機先を制することを求める。

ロバート・ブラウニングの悲劇「紋地の汚れ」

(五) メルトーンの死

(1) メルトーンの真情吐露

ソロルドは森を突き貫け、庭園をあちこち歩き廻り、最後にミルドレッドの部屋の窓下のいちいの木の並木道の端に来たのである。真夜中の十二時が打つとき、一人の男がすっかりマントにくるまってやって来る。やがて灯が動き、紫色の窓枠の処で光が放たれる。男はいちいの木に登る用意をする。憤りに燃えるソロルドは男を呼び止め、喉元を掴み、月光の下に引きずり出す。男は相手がソロルドであることを知る。ソロルドは男に名を言えと迫る。男は名を言わさないで欲しいと懇願する。しかしソロルドはそれを聞き入れない。そこで男はマントを脱ぐ。ソロルドは求婚者メルトーンであることを知り、騙された^{だま}と激怒し決闘を強い、鋭い一突きを与える。メルトーンは一撃を食ったが、格好だけの抵抗を示し、倒れ、起き上ろうとしない。ソロルドはかれの一突きが致命傷を与えたとは思えないので不思議に思い、相手の顔を見た途端、その顔の若さに驚く。メルトーンは苦痛を覚えながら言う。かれはほんの少年にすぎず、自らは悪いとは知らずに悲しむべきことをし、それを悪いと知ったとき正式に求婚することが最善の方法であると思ったと。そして更につづけて

「しかしあなたは、わたくしの生命を取るしか方法はないとお思いでしょう。でもわたくしの方法は、あなたのためにも、かの女のためにもよいと考えたのです。そして今、あなたが違った風に決定されたので、わたくしはあなたにわたくしの生命を捧げ、永遠の生命を得たいと存じます^④」

と。ソロルドはメルトーンのあまりにも若い姿を見、直ちに少年の軽率からの妹との情交と察し、かれの罪を許す気持になる。メルトーンは更に言葉をつづけ、自らを破滅させたのは、かれがソロルドを畏怖していたこと、即ちソロルドは人間として完成され、あらゆる処で学者、紳士として名が通り、そのずばぬけた名声がメルトーンにかれを畏怖させたことを告げ、それと同時に、かれはミルドレッドとの結婚によって、ソロルドと兄弟として結ばれることを切望し、昨日ソロルドと面会し、優しい眼差で迎えられ、賞賛と親切な言葉を受け、寛大の御仁なるを知り、畏怖の念は去り親愛の情の深くなるを覚えたことを切々と述べるのであった。

(2) メルトーンの臨終いまわの際きわの悲痛な叫び

けれどもメルトーンはやがて目がどんよりして、ソロルドもはっきりと見えなくなったので、ソロルドの顔を見上げようと起き上る途端、かれの目はミルドレッドの部屋の灯火を認め、

「ああ、可哀相に、かの女はどうなるか。トレッシャム卿、かの女の生命と、血の逆ほとばしるわたくしの生命とは堅く結ばれています。わたくしは生きます。生きていなければなりません。わたくしの身体からだをかの女の方に向けて下されば、わたくしは生きられ、かの女を救うことができます。トレッシャム卿、ああ、わたくしの言葉の聞きいれられんことを。聞いて戴けませんか。かの女とわたくしの生命の上に思慮のない足を置くどんな権利があなたにありますか。わたくし達二人が死ぬとき、あなたは言われるでしょう。『メルトーンに思慮があったら万事は違った風になったであろう』と。お仰せの通りです。兎も角わたくし達は罪を犯しました。それで死にます。トレッシャム卿、わたくし共が失くなくても、あなたは決して罪を犯してはいません。そんなこと誰が決められるのですか。それは神が決められます。あなたも死なれます。そのとき、神が審判なされます」

と。かれとかの女の愛は極めて深いが、二人共、罪を犯したが故に死なねばならぬ。しかし二人が死んでも罪はソロルドにはなく、裁きは神の手にあると云うのである。ソロルドもこれに首肯うなづき、神の審判は既に始っていると云う。ここでメルトーンは、今度は、ミルドレッドへの伝言として、浮世の心なき冷酷な者共から離れ、かれと共に死なんことをと次のように力強く叫ぶのであった。

「かの女は彼処あそこに座り、わたくしを待っています。あなたはかの女に言って下さい。あなたがです、他の人ではありません。あなたはわたくしが死ぬのを見た。そしてわたくしは息を引き取りながら『わたくしはかの女を愛している』 \wedge I Love Her \vee と云ったと伝えて下さい。

この三字の短い言葉の意味は理解なさらないでしょう。わたくしがかの女を愛するということは、かの女の思い出を持ちながら、血の坂を死の世界へと、この言葉がわたくしを摺ひきずり行くことです。ということは、この言葉をかの女に、今、わたくしが直接話し掛けています。憐れみの心なく、良心の呵責のないあなたに話しているではありません。かの女に話し掛けるわたくしの意味はこうなのです。『僕と一緒に死ぬ』可愛いミルドレッドよ。死ぬことは容易たやすいことだ。そして浮世の幾多の不親切から逃れることだ。これからさき、お前に話し掛けられそうな乱暴な言葉や、お前になされそうな荒々しい行為を思うと、僕は安心して墓場に横たわることなど到底できない。浮世の心なき者共に

ロバート・ブラウニングの悲劇「紋地の汚れ」

僕の心を知らせてやりたい。ああ、僕は浮世の奴等がこのようなことを口にする僕の唇に打撃を加えることは充分承知している。またいくら鞭打たれてもこの罪人の僕を打ち砕く力などないことも知っている。知っているが故に、死衣と蛆に包まれて横たわることができるのだ。ミルドレッド死ね。光栄の浮世なんぞかれらに任せておけ。浮世の奴らが、浮世の外にわれらを投げ出しても神は屹度われらを善人と認めて下さる」

かく叫んでやがてメルトーンは死んで行く。オーステンとジェラードはメルトーンの死体を運び出す。そのとき、ソロルドはグエンドーレンをメルトーンの倒れた場所へ連れて行き、

「そなたとオーステンが腕を組んで、われらの祖先からのこの土地を散歩するとき、牧場と荒地の上には、夜が草木の囁きのすべてを閉じ込めていた今迄の静寂とは異った一つの陰影が現われまいだろうか。そんなことが起らぬにしても、そなたは暗いいちいの並木道の血に染ったこの芝生を無造作に横ぎって、かれの胸(メルトーンの死体)を忘れ去ることがあるだろうか」

と、メルトーンの怨死(えんし)の魂魄がいつまでも浮世に漂うを恐れ、また、庭の古木を見ては、その木の下にメルトーンの亡霊が現われるかの幻想に駆られるのである。

六 ミルドレッドとソロルドの死

(1) ソロルドの悲傷の詫わび

ミルドレッドはただ独りかの女の部屋で思いに耽りながら、不安のうちにメルトーンを待っている。そのとき、外から「ミルドレッド」とソロルドが呼ぶ。「お入り。神はわたくしの願を聞いて下さった。あなた独りだけです。もう罵りの言葉を言わないでね」とミルドレッドは罵言を言わないようにと云ってはみたが、また「お兄さま、罵りの言葉を言いなさい。そんなもの気にしません。あなたが言いに来られたすべてを言いなさい。わたくしがどうなればよいのです。ああ、あなたの額や頬をそんなに青白くさせているあなたの思いを言いなさい」と言う。するとソロルドは今迄とは打って変わった態度で、何年前か、かの女と共に水蓮を取りながら徒渉した思い出を語り、優しい声でかの女に呼びかけたので、かの女は「あなたは昨日より優しい声でわたしの名を呼ばれますがそれはどうゆうことですか」と問う。ソロルドは答える。

「今朝、わしが、わし自身のことではなく、お前のためを思って、わしの役目を果たしたことが、わしの心にとても重く申し掛かる。無論どんな些細なことでも、お前に関係することには、わしは喜んだり、悲しんだり、満足したり、不満に思ったりする。わしは心の中で悩みながらもお前を叱ることさえある。実際、屢々叱りつけた。お前わしを許してくれるかい」

と。かの女はあまりに変った言葉に驚いて、

「それはお兄さまの言葉ですの。わたくしをからかっていらっしゃるの。いや、からかうという言葉をおたくしに言わせるなんて」
と言う。ソロルドは言う。

「わしを許してくれ。ミルドレッド。お前黙っているの、可愛い妹よ」

と、するとミルドレッドは、はっとして立ち上り、

「ヘンリー・メルトーンは今夜どうして来ないのかしらん。あなたも黙っていらっしゃるのね」

と言っかかの女は兄の外套の裾の刀身のはいついていない鞘を指して、

「ああ、あなたに代って鞘が語っています。あなたはヘンリーを殺したのですね。さあ、もっと言って下さい。わたくしがあなたを許すとは何なのですの。お兄さま、わたくしは許そうと思ひます。あなたは何と惨めなお方ですこと」

と。そこでソロルドはヘンリーを殺したことに就いて許して欲しい、その行為に関してはやがて神が判定される。かれは最後の審判の日に失望と恐れのうち神の裁きを待つと言う。するとミルドレッドは

「ああ、そうですとも、わたくしに許す力など少しもありません。その通りです。あなたはわたくしの心をすべての心配から解放しました。死ということが永久にあの人をわたくしのものに確実にしたのです。あの方の最後の言葉のことを言われましたね。あの方は屹度わたくしにそれを言われたと思ひます。それにわたくしはお答えしたいと思ひます。言葉でなしに、あの方の最後の、あの方自身の心でわたくしは答えます。死……………」

と。するとソロルドは

「死とな。お前も亦死ぬというか。グエンドーレンも言っはいたが。わしは絶対にお前の死ぬことを望まぬ。尤もグエンドーレンはそれを

ロバート・ブラウニングの悲劇「紋地の汚れ」

確信してはいたけれど^①」

と。するとミルドレッドは言う。

「ああ、お兄さまってば。あなたも亦愛して下さったわたくし、あの人をあなたが殺している間あの人に来られるのをここに座って我慢していたわたくし、このわたくしの青春、希望、愛に燃えたあの人血潮は消すことなどそう軽卒にはできません。ああ、疑もなく、あなたはあの人を困まらせ、可哀相にも子供じみた言葉をあの人に言わせました。あなたの激怒を取り去り、わたくしの苦情を取り除くようにと可哀相にあの人に最善の努力を強いられました。あなたはわたくし共の恋と無知、短い間の狂気と永い間の絶望の話をさせました。あなたはこれらすべてをあの人に語らせました。しかもあなたの家門の汚れの法則はあなたがかれを打ち殺す前に、あの人懇願を聞き入れなかったのです。最後にあの人生命を求めて、あなたの目を見上げ、見入ったとき、あなたはあの人を打ち殺したのです^②」

(2) 妹の寛恕と兄の罪の重荷

するとソロルドは

「いやそうじゃない。もしわしがかれの言うことを聞いていたら、もしかれが真実の半分でも語っていてくれたら、もしわしをもっと永い間かれを見ていたら、わしは思いとどまったであろう。そうだ。かれが輝く頬かほの上うへに月光を受けて、あそこに横たわっていたとき、かれの語る前にその話を推測していたら、わしがかれの罪とお前の罪の困った表面の底に動かすことのできない純潔を見ていたら、もしわしがすべてが濁って見えるところを一瞥していたら、そしてその下の静かな処への入口がちらっと見えていたらと切に思うのだ。ところがわしは一瞥しようとしなかった。わしの罪は近づいている。ミルドレッドよ、これが真実だ。そしてお前はそれを言いつづけてきた。お前はわしを呪うかい^③」

と。ミルドレッドは

「わたくしはあなたのなさいましたことを忘れはしませんが、
生きとし生けるものを絶望せしめないあの天国にわたくしが近づくとき、

最も卑しい虫けらにも、身の汚れを忘れしめるあの天国にわたくしが近づくと、
わたくしは心の奥からお兄さまを祝福します。

そうです。過去を考えなされるな。ひき下る雲も、わたくしの友とあなたの間にある間は、同じ雲であることに変わりはありません。あなたはそ
の雲の蔭の下であの人を殺しました。しかしその疑惑は回復されないのでしょうか。わたくしはあの人を心を持っています。わたくしはあ
の人の心をわたくしから取って、あなたに与えましょう。わたくしの心があなたを愛するように、あの人を心はあなたを愛しています。ヘン
リーよ、わたくしを確めて下さい」

と言って、兄の首に腕を投げかけたままかの女は死ぬ。そのときオーステンと一緒に部屋に入って来たグエンドーレンは Mildred の死に驚
くが、同時にソロルドの顔色の悪さに一層驚き、オーステンをソロルドの近くに呼ぶ。オーステンがソロルドに近づき顔を見ると、泡がかれの
喰いしばった歯から滲み出て、上下の唇が全く噛み合わない処で両唇が黒くなっている。ソロルドは毒を飲んでいたのであった。やがてソロ
ルドは言う。

「わしが毒を飲み干したとき、既に言ったように浮世はわしにとっては浮世でなくなった。わしの全身に溢れていた生気がわしから脱けてし
まった。わしの目には見えない道が示されている。そして疲れ果てて心臓の弱くなったこのわしは、浮世という野外劇の俳優のこのわしは、
仮面をかぶった本隊を目に見える道への入口から行進させ、わしはその入口で落伍する。そして相も交らずわしは目に見えない道を突き抜け
て行く。今、突き抜けているところだ」

と。更にソロルドは

「 Mildred は既に一層穏かな顔付をしている。オーステンよ、わしはお前が見える。お前のいるのを感じる。ここにわしの手がある。そ
れにお前の手を入れてくれ。お前グエンドーレンも亦ね。お前達二人は既に Treuscham 卿と卿夫人となったのだ。Treuscham 家の名も名
誉もお前達のものだ。オーステンよ、わが紋地を持ち堪えて、汚れが来ないようにしてくれ」

と言う。オーステンが汚れは来させないと答えるとソロルドは次のように呟いて死ぬ。

ロバート・ブラウニングの悲劇「紋地の汚れ」

「その言葉はわしも言った。しかもそれがやって来た。万一それがやって来ても天罰を与えるのは神であって人間ではない。わしを忘れないでくれ^②」
と。

(七) 結 び

この劇は人物の動き、構成の面白さもさることながら、最もわれわれの心に訴えるのは今迄味読してきたような台詞の中に溢れている抒情性と哀調であると思う。メルトーンとミルドレッドの慕情、二人の互いの愛の告白、メルトーンが死に際しミルドレッドを死の道連れに誘う情熱的愛はすべて清純の愛の灼熱的燃焼の抒情詩である。登場人物のすべてが善意の人間でありながら、何の施す術すべもなく、悲運に導かれ行き、特にソロルドが、かれの善意が深ければ深い程、その苦悩の皺を一層深く刻み込んで行く姿は哀調そのものである。またメルトーンとミルドレッドの二人が喜びの絶頂から急転絶望の奈落へと落ち込み死の淵に沈む姿は悲劇の極みである。このソロルドの苦悩、メルトーンとミルドレッドの絶望は、すべての人間の背負っている人間存在の惨さ、従って人生のむなしさを表現している。しかしこの人生のむなしさは偉大なむなしさである。人間がこの偉大なむなしさを痛感するとき、人間は永遠につながりをもち、崇高な哀愁の境地に達するのである。詩人ブラウニングが、人間存在の惨さ、人生の偉大なむなしさを痛感し、この境地にあったとき、この劇が生れたのである。これがブラウニングのこの劇詩創作に際しての詩的精神であり、かれのこの劇詩創作の詩的動機であった。ここにこの高雅な抒情味豊かな崇高な哀愁美の溢れる悲劇が生れたのであった。

〔1〕 註

- ① 名優マクリーデンがブラウニングの最初の劇「ストラフオード」を自らの監督する Covent Garden Theatre に上演し、自ら主演を演じたが、この名優の息子が病気になるたとき、病後の読物として有名な The Pied Piper of Hamelin を載呈するほどの間柄であった。
- ② この劇を上演するに際し、マクリーデンがメロドラマ的な数々の注文をつけ、また主演を演じることを肯んじなかったため、ブラウニングは無名の俳優 Mr. Phelps をして代って出演させることにした。すると急転マクリーデンが自ら演じると言い出した。けれどもブラウニングは Phelps の出演を強行した。

これが原因となって、マクリーディとの間に不和の種を蒔くに至った。

③ Robert Browning : A Blot in the 'Scutcheon, Act I, Scene III, ll. 81—86

(③と⑨の唄に表現される慕情は十八世紀の英雄悲劇にみられる感傷的慕情や十九世紀のメロドラマにみられる理知的慕情と異り、エリザベス朝浪演劇にみられる純粋なロマンティックな慕情である。)

④ ミルドレッドの恋人で、実は求婚者メルトーンと同一人であるが、この事実を兄は第三幕第一場まで知らずに事件が展開する。

⑤ ミルドレッドを暗示している。

⑥ メルトーンを暗示している。

⑦ ミルドレッドを暗示している。

⑧ この『 』の言葉はミルドレッドの言葉を暗示しているので、ミルドレッドの慕情とみることができる。

⑨ Robert Browning : A Blot in the 'Scutcheon, Act I, Scene III, ll. 87—90

⑩ 結婚の成就を予想している気持。

⑪ 二人の情事のこと。

⑫ 不安な密会のこと。

⑬ 結婚生活の幸福を予想しての言葉。

⑭ Robert Browning : A Blot in the 'Scutcheon, Act I, Scene III, l. 119

⑮ *ibid.*, ll. 111—119

⑯ *ibid.*, l. 120

⑰ ミルドレッドと関係さえしておけば、正式の求婚をすれば、どんな障害があっても、結婚は成立するとの計画的悪事をメルトーンは考えたミルドレッドが思ったこと。

⑱ Robert Browning : A Blot in the 'Scutcheon, Act I, Scene III, ll. 135—149

(ここの言葉には、ブラウニングがメロドラマの甘たるさから脱れようとする努力が見受けられる。)

⑲ *ibid.*, ll. 162—163

⑳ *ibid.*, ll. 164—173 参照

㉑ *ibid.*, ll. 174—184

(㉑と㉕及びその間にある言葉のすべての情熱は感傷悲劇にみられる感傷ではなく、真実の愛の炎であって、その炎上の様子が近代的写実の筆致で抒情的に描かれている。)

㉒ *ibid.*, ll. 184—193 参照

ロズー・トリトリの恋「救世の舟」

㉓ *ibid.*, ll. 195—209 参照

㉔ *ibid.*, ll. 209—212

㉕ *ibid.*, ll. 213—217

㉖ *ibid.*, ll. 237—240

(この句の○印の箇所は Charles Dickens が深い感動をうけた箇所と言われている。

Donald S. Hair : *Browning's Experiments With Genre*, p. 58

Mrs. S. Orr : *Life and Letters of Robert Browning*, p. 118

Edward Dowden : *The Life of Robert Browning*, p. 50

} 参照

㉗ 第一幕第一場でメルトーン卿の行列をトレッシュム家の召使どもが、お祭り騒ぎで見守っている中で、忠僕でありながら、不機嫌な顔をして行列を見ようとしぬのがジェラードで、これには観客若しくは読者に *suspence* を起こさせる技巧が伺われる。

㉘ Robert Browning : *A Blot in the 'Scutcheon*, Act II, ll. 80—120 参照

(ソロルドの虚偽についての思索的な意見の述べられているところ。ここの長い言葉が劇の流れをせきとめるとしてマクリーディが永い間、上演に踏み切れなかったところ。しかしわたくしには劇全体からみれば大して流れをとめているとは思えぬ。)

㉙ 平素よりソロルドがトレッシュム家に紋地の汚れないようにと口癖のように言っていたから、今、かれの苦悩の表情をみて、それと察したのである。

㉚ かれが妹と一緒にさがしていたイタリヤ語の一文を古本の中に見付けたので、それを英文に訳して知らせてやるとの口実。その一文とは“*Love conquers all things.*” で、これを種々説明し、その説明の最後に、ソロルドの妹に対する愛が最もすぐれた愛である。従ってかれの妹に対する愛こそすべてを征服する、それ故、妹についての噂は信じないけれども、一応尋ねると言っ、妹に尋ねるのである。そして、ここで愛の思索的論述があるので Act II, ll. 152—173を参照のこと。これも㉘と同じくマクリーディが上演を渋ったところ。しかしわたくしは㉘と同じくさほど劇の流れをとめていると思わぬ。

㉛ 恋人を裏切る罪に陥れないで欲しいとの意。

㉜ Robert Browning : *A Blot in the 'Scutcheon*, Act II, ll. 231—241

㉝ *ibid.*, ll. 245—261 参照

㉞ *ibid.*, ll. 261—262 参照

(ここで兄が求婚者と恋人の同一人であることを洞察し得れば、問題は起らなかったのであるが、そうでなくして、兄は妹が色男を断念するかの体裁を装う騙しの手であると誤解することから問題が起る。)

㉟ *ibid.*, ll. 265—271

(㉟と㉞の言葉は俳優が抑揚豊かに語るべき箇所で、俳優の最も力量を発揮すべきところ。ただ怒号叫喚的な下手な熟演に終ると、王政後古期の英雄悲劇の欠点を暴露する。)

③⑥ *ibid.*, ll. 321—326

③⑦ *ibid.*, ll. 371—373 参照

③⑧ 引用③⑥の最後の言葉即ち「恥辱かかの女を地上から追い払われたこと」を指している。

③⑨ Robert Browning : *A Blot in the 'Scutcheon*, Act II, ll. 374—381参照

④⑩ *ibid.*, ll. 406—407

(④⑩から④⑨までの問答形式の言葉はブラウニングが機智と推理というメロドラマの長所を取り入れていることを示す。)

④⑪ *ibid.*, l. 408

④⑫ *ibid.*, l. 409

④⑬ *ibid.*, ll. 409—414

④⑭ *ibid.*, ll. 414—415

④⑮ *ibid.*, l. 416

④⑯ *ibid.*, ll. 416—417

④⑰ *ibid.*, l. 418

④⑱ *ibid.*, ll. 418—419

④⑲ *ibid.*, l. 420

⑤⑰ *ibid.*, ll. 420—421

⑤⑱ *ibid.*, ll. 422—423

⑤⑲ *ibid.*, Act III, Scene I, ll. 66—72 参照

⑤⑳ *ibid.*, ll. 73—83 参照

(この場面は Thomrs Kyd の *The Spanish Tragedy* に始まり、Shakespeare の *Hamlet* を経て、エリザベス朝末期の Cyril Tourner 等に到って随落に向った流血悲劇の怒号叫喚というのでなく、ただ一撃だけで後はメルトーンの悲痛な告白に終るところは、ギリシャ悲劇の簡素でありながら極めて悲劇的な終末に導くのと軌を一にし、この悲劇をして風格を保たしている。)

⑤⑴ *ibid.*, ll. 112—118

⑤⑵ *ibid.*, ll. 132—146 参照

⑤⑶ *ibid.*, ll. 147—157

⑤⑷ *ibid.*, ll. 158—176

(⑤⑶⑤⑷⑤⑸の台詞は幻想的、情熱的であるため、非現実的な言葉を含みながらも *eccentric* にひびかず、一種神秘的、美的表現による文学的な愛の表現とな

ロクレーナ・トハカリソケの悲劇「救世の呪い」

ロズー・アトカリスの悲劇「救世の死」

り、ブラウニングの詩人としての資質が伺われる。）

⑤⑧ *ibid.*, ll. 206—213

(⑤⑧と⑤⑨は浪漫主義の情緒の一つ超自然的なものへの憧れを示し、ブラウニングが本質的には浪漫主義の詩人であることを示す。)

⑤⑨ *ibid.*, ll. 217—225 参照

⑥⑩ *ibid.*, Act III, Scene II, l. 29

⑥⑪ ミルドレッドはメルトーンが入ってきたと思ったが、実はソロルドであったことを示す。

⑥⑫ *ibid.*, ll. 30—31

⑥⑬ *ibid.*, ll. 32—35

⑥⑭ *ibid.*, ll. 44—45

⑥⑮ *ibid.*, ll. 46—52

⑥⑯ *ibid.*, l. 52—53

⑥⑰ *ibid.*, l. 54

⑥⑱ *ibid.*, l. 55

⑥⑲ *ibid.*, ll. 56—60

(⑥⑲から⑦⑸まで全体にわたり、登場人物のすべてが善意の人間でありながら悲運に導かれ、人間存在の惨さ、人生のむなしさを痛感する悲劇性がよく表現され、悲愁の連続に息つく暇もない。)

⑦⑰ *ibid.*, ll. 70—75

⑦⑱ *ibid.*, ll. 76—78

⑦⑲ *ibid.*, ll. 80—93

⑦⑳ *ibid.*, ll. 93—104

⑦㉑ *ibid.*, ll. 105—117

⑦㉒ *ibid.*, ll. 127—129 参照

⑦㉓ *ibid.*, ll. 133—140

⑦㉔ *ibid.*, ll. 142—147

⑦㉕ *ibid.*, ll. 151—153

[2] 参考文献

1. Edward Berdoe : The Browning Cyclopadia
2. Mrs. S. Orr : Life and Letters of Robert Browning
3. Mrs. S. Orr : Handbook to Browning's Works
4. Charlotte Porter and Helen A. Clarke : A Blot in the 'Scutcheon
5. Stopford A. Brooke : The Poetry of Robert Browning
6. Osbert Burdett : The Brownings
7. Donald S. Hair : Browning's Experiments with Genre
8. Edward Dowden : The Life of Robert Browning
9. Arthnur Symonds : An Introduction to the Stndy of Browning